

本書は、高校生の頃に集団レイプに加害者として関わった過去を持つ主人公が、自らの犯した罪を告白し、謝罪を試みようとする物語である。彼はインターネット上に、事件についての文章を実名で公開しようとする。そして名も知れず行方も知れない被害者が名乗り出たら、心を尽

レイプ謝罪 新



端的に言って、彼の試みはおぞましい。考えてみてほしい。たとえ被害者が明らかにされていないとしても、

と、加害者に語りを占有されることの恐ろしさを。彼は謝罪をめぐる自らの試みについて、周囲に雄弁に語る。彼の告白を初めに聞かされた婚約者の女性は嘔吐する。当然である。けれども彼の決意は揺らがない。告白を聞かされ、結婚を控えた姉は激高する。それでも彼

が新たな傷を生んでいることは明らかである。だが彼は気づかない。なおも沈黙を選ばない。要するに彼の行いは、ゆるされたい、自らを悩ませる罪悪感を取り除きたい、ということでは済まないのだ。そんな謝罪が何になるだろう？被害者は沈黙を強いられている

石」とは、抑圧された者の苦痛の叫びの象徴である。「石を黙らせて」と名付けられたこの小説は、ある根本的な問いを突きつけているのだ。ゆるされたいと望むことは、被害者を黙らせようと欲することにはほかならないのではないかと。(水上文・文筆家)

(講談社・1870円)
イ・ヨンドク 1976年埼玉県生まれ「死にたくなったら電話して」で

天使日記

寺尾 紗穂著

「もっと、まっさらに、よく見てみませんか」。本書はわれわれのすぐそばにある、ありふれた、しかしながら多くの人が見過ごしてしまっ、とっておきの秘密の場所を見つめることを、そっと促す。その場所を仮に、見えるものと見えないものの真ん中に息づく世界とでも呼んでみようか。そこは優しい光に包まれ



た懐かしい場所でもある。その場所に立てば、世界に画一的に切りとることができないもの、数値化できるものなど何もないことが分かる。大

異界 まっさらに見る

文字によって書かれた「正規の」歴史や、社会のシステムに回収され得ない民衆の営みと叡智が見える。他者の心の奥底に、とてつもない宇宙が広がる。孤独な魂たちが時に交わり離れ、それぞれの軌道を揺れながら旅を続け、歌うのが聴こえる。

本書では、音楽家である著者の旅先での出会いや、日常における心の揺れが、淡々と歌いかけるようにつづられる。とりわけ印象深いのは、著者の娘たちと天使が出会い、数カ月にもわたり交流する

エピソードだ。天使はある日、公園の生け垣の間からひょっこり現れる。娘たちと一緒に遊んだり、坂を上ったり、学校の中をくまなく見回ったり、改札で待っていたりする。天使はまた、天国での日常や修行のことを娘たちに伝えたりもする。娘たちを通して、著者も時に天使と対話を行う。「本当はもっと、たわいもなく、風のように、異界のものたちがすぐ隣にいるのだろう」。それらの存在は確かに、われわれによって見つけれ

れ、声を掛けられるのを待っているのかもしれない。そのような世界からまなざした時、人間の「客観的思考」に支えられた科学やその広がりや発展とは、一体どのように見受けられるのだろうか。見える／見えないでは区切れない世界に対峙し、それをあるがままに引き受ける。そこからまなざし、考えることができるのなら、それはなんて豊かなことだろうか。(川瀬慈・映像人類学者)

(スタンド・ブックス・2420円)
てらお・さほ 1981年東京都生まれ、音楽家、文筆家。著書に「南洋と私」「彗星の孤独」など。